

帰国後の龍山徳見とその周辺

——『黄龍十世録』『小仏事』を中心に——

大坪亮介

はじめに

臨済宗黄龍派の禅僧龍山徳見（一二八四～一三五八）は、七十五年に及ぶ生涯の半分以上を元で過ごした。その在元期間の長さゆえ、龍山については、これまで主として禅宗史研究や日中交流史研究の分野において多大な関心が注がれてきた。とりわけ在元中の活動や帰国の経緯をめぐっては、詳細な研究がある。^{〔注1〕}

一方、帰国後の活動については、義堂周信や絶海中津といった、後に五山文学を代表する禅僧も龍山に師事したことなどが指摘されている。^{〔注2〕}しかし、在元時から帰国時の事績に対する高い関心に比べると、帰国後の龍山に焦点を絞り、かつその文学的な影響を具体的に明らかにしようとする研究は、未だ手薄であるといえる。

とはいえ、龍山が帰国後に詠んだ詩が『太平記』や『三国伝記』にも一部利用されるなど、龍山の文業は五山文学の範疇を超えた影響を与えたものと見られる。とすれば、帰国後の龍山およびその周辺の文学的環境や、龍山の詩、偈頌類の受容をめぐっては、さらにその実態を解明していく余地が残されているように思われる。そこで本稿では、その足がかりとして、帰国後の龍山が残した偈頌類か

ら、その人的環境の一端を探っていくことにしたい。

一 帰国後の龍山が残した偈頌類

龍山の生涯については、中巖円月（一三〇〇～一三七五）による行状「真源大照禅師行状」^{〔注3〕}（以下、「行状」と呼ぶ）により大略を知ることができる。この「行状」によれば、龍山は千葉氏の一族として下総国に生まれた。十二歳で寿福寺に入り、寂庵上昭（一二二九～一三一六）を師としたという。その後、当時来日していた一山一寧（一二四七～一三一七）に偈の才を認められ、参ずることを許された。二十二歳で元の四明に至り、帰国したのは「行状」によれば貞和五年（一三四九（実際には貞和六年））のことで、龍山は既に十六歳になっていた。四十年以上もの間、元に滞在していたことになる。帰国後は足利尊氏の弟直義の招請によって建仁寺に入り、その後、南禅寺や天龍寺の住持も務めた。「行状」に「本国王臣、望風欽仰」とあるように、足利尊氏・直義兄弟とは密接な関係を築いていたようである。もちろん、禅僧たちも龍山の声望を慕い、挙つてそのもとに参じた。^{〔注4〕}

龍山は延文三年（一三五八）十一月に示寂した。若年より文才を發揮した龍山は、生前に多くの詩や偈頌類を遺している。それらは龍山の法嗣無等以倫が版行した『黃龍十世錄』に、左のように分類されて収録されている。

「小仏事」……龍山が帰国後に携わった仏事に関するもの。

「仏祖贊」……仏祖贊。

「偈頌」……龍山が授けた道号頌の類。

「元朝偈頌」……龍山の在元中から帰国時にかけての偈頌類（一部帰国後のものも含む）。

いずれも龍山の交流を伝える資料ではあるものの、本稿では、帰国後に作成されたものを多く含む「小仏事」を主な対象として分析を行っていく。

「小仏事」は以下から構成される。

- ①雪村和尚（＝雪村友梅） 七周諱日陞座
- ②天龍開山特賜正覚心宗国師（＝夢窓疎石） 七周諱日陞座
- ③長寿寺殿（＝足利尊氏） 追薦就于等持寺陞座
- ④前住南禅普照大光国師（＝通翁鏡円） 三十三周諱日陞座
- ⑤仏燈国師（＝約翁徳儉） 三十三年忌辰拈香
- ⑥天龍開山正覚心宗国師周祥（＝一周忌） 雲居庵拈香仏事
- ⑦後醍醐院御忌拈香
- ⑧玉山和尚（＝玉山玄堤） 入祖堂
- ⑨高山和尚（＝高山慈照） 十三回諱辰靈洞庵掛諡号広濟禪師扁額
- ⑩土岐光祿女為慈母七周諱預請焼香
- ⑪前江州太守雪溪源公小祥於大龍庵左建小浮図安藏遺骨請予入塔
- ⑫征夷大將軍仁山義公（＝足利尊氏） 鎮龜

⑬覺庵和尚秉炬

⑭興英都聞秉炬

⑮同入塔

⑯愚首座秉炬

⑰晦谷（＝晦谷祖曇）和尚秉炬

⑱樹藏主下火

⑲晝堂藏主下火

⑳本源禪師（＝鉄庵道生）雕像点眼

㉑備州常興禪寺新造釈迦文殊普賢尊像点眼仏事

これらはおよそ以下に分類される。

A 禅僧の年忌に関わるもの……①・②・④・⑤・⑥・⑨

B 禅僧以外の年忌に関わるもの……③・⑦・⑩・⑪

C 禅僧の葬儀に関わるもの……⑧・⑬・⑭・⑮・⑯・⑰・⑱

D 禅僧以外の葬儀に関わるもの……⑫

E それ以外の仏事に関わるもの……②①

一目で分かる通り、A・B・C・Dとした禅僧や天皇家・將軍家の葬儀や年忌法要に関わるものがほとんどである。特に③の「長寿寺殿追薦就于等持寺陞座」や、⑫「征夷大將軍仁山義公鎮龜」は、足利尊氏の葬儀や追善の仏事に龍山が参加した際のものであり、前掲「行状」の「本国王臣、望風欽仰」という記述を具体的に裏付ける。

このように、「小仏事」はわずか二十一編を収録するに過ぎないものの、帰国後の龍山とその周辺の人々との関わりを知る上で重要な資料であるといえよう。なかでも本稿で特に注目したいのは、右の一覧で太字で示した⑩「土岐光祿女為慈母七周諱預請焼香」と、⑪「前江州太守雪溪源公小祥於大龍庵左建小浮図安藏遺骨請予入塔」で

ある。というのも、次章以降で詳述していくように、この二つの仏事からは、従来ほとんど注目されてこなかった、龍山と將軍兄弟以外の武家との密接な関連を窺うことができるからである。

二 龍山と雪溪

論述の都合上、先に①「前江州太守雪溪源公小祥於大龍庵左建淳図安藏遺骨請予入塔」から検討を加えることにしたい。まずは全文を掲げよう。

前江州太守雪溪源公小祥於大龍庵左建小浮図安藏遺骨請予入塔
三界無法、何処求_レ心。四大本空、仏依_レ何住。故我江州刺史雪
溪居士、其居_レ家也、襲_二世祿_一而崇_レ孝、其仕_レ官也、拒_二敵陣_一
而尽_レ忠。忠孝既両全。生死本無礙。嘆_二小祥之遽至_一、念_二前事_一
之未_レ忘。平生御_レ物以_レ慈。亦能衛_レ宗為_レ務。守_二江城_一而愛_二
遺民庶_一、尹_二洛京_一也沢_二被_レ哀瀝_一。富貴乃夢幻之場、干戈為_二
遊戲之具_一。顧_レ玆累代之巨族、名器然後成_レ名。幸有_二三俊之
追蹤_一、將門咸謂_レ出_レ將。佩_二毗盧正印_一、透_二向上機関_一。無
縫塔成_レ影团欒、黄金充_レ国堪_レ埋_レ玉。因思_二三壺輔_一晋室_一、当
如_二三蔣侯護_一鍾山_一。陰翊故家、視_レ履清_レ迪。瑠璃般_一殿_一上有_二
知識_一、試_二問報_一忘事有_二無_一。

「前江州太守雪溪源公」なる人物の「小祥」すなわち一周忌に、「大龍庵」に「小浮図」を建てて遺骨を納め、「予」すなわち龍山が入塔を務めたことが知られる。本文では「其居_レ家也、襲_二世祿_一而崇_レ孝、其仕_レ官也、拒_二敵陣_一而尽_レ忠」とあるように、雪溪の生前の武勇や忠孝を称え、「嘆_二小祥之遽至_一」と、早くも一周忌がおとずれ

てしまったことを嘆く。さらに、「守_二江城_一而愛_二遺民庶_一」として、雪溪の「江城」での統治ぶりにも触れている。そして、「因思_二三壺輔_一晋室_一、当如_二三蔣侯護_一鍾山_一」とあるように、雪溪の事跡から壺が晋を助けた故事や蔣侯が鍾山を守った故事が想起されている。

これらの記述からは、雪溪が前近江守であり、かつ源氏の武士であつたことが判明する。加えて、延文三年（一三五八）十一月に示寂した龍山が一周忌の仏事に携わっていることからすれば、雪溪が死去したのは、延文二年（一三五七）以前ということになる。

では、この雪溪は具体的に誰に比定し得るのであろうか。『五山文学新集』の注記によれば、赤松師範のことであるという。師範については、『赤松系図』に範資の子であるとの記載がある。同系図の中でも師範の父範資に関する詳細な情報を有し、信頼度が高いとされる『赤松系図』その三（岡本）の当該箇所を挙げよう。

範資（美作守信濃守左衛門尉從五位／法名世範。摂州守護。

号三七条。号二摸叟_一）

光範（正五位信濃守左衛門尉使摂州守護）

朝則（肥前守号二有田_一）

直頼（宮内少輔号二本郷_一）

師範（近江守号二広瀬_一）

貞範（從五位下号二伊豆雅樂助_一。筑前守次郎左衛門尉／法名世貞。号二実翁_一。）

（後略）

『統群書類從』には六種の『赤松系図』が収録されており、いずれ

も範資の子として師範の名を挙げ、「広瀬」との注記を付している。さらに『赤松系図』その三（岡本）・その五・その六（書写山本）には、師範にそれぞれ「近江守号三広瀬」^①、「近江守 広瀬断絶」^②、「近江守 広瀬」とある。これらは、雪溪が「前江州太守」であったとする^③「前江州太守雪溪源公小祥於大龍庵左建小浮図安藏遺骨請予入塔」の記述とも符合している。

『赤松系図』以外で師範について記す同時代の文献は決して多くはない。^④その中であつて、『太平記』には複数の合戦記事に師範が登場する。まずは巻三十「怨霊驚人事」の例を挙げよう。観応二年（一三五二）に高師直・師泰兄弟が足利直義と対立して敗れた後も、依然幕府内部の動揺が収まらなかったことを語る箇所である。

禍イ利欲ヨリ起テ、止ム事ヲ得ザレバ、終ニ己ガ分国ニ下テ、本意ヲ達セントヤ、仁木左京大夫頼章ハ、病ト称シテ有馬ノ湯ヘ下ル。舍弟右馬権助義長ハ、伊勢ヘ下リ、細川形部大輔頼春ハ、讃岐ヘ下ル。佐々木佐土判官入道々誉ハ、近江ヘ下ル。赤松筑前守貞範・甥ノ弥次郎師範・舍弟信乃五郎兼頼ハ、播磨ヘ下ル。土岐刑部少輔頼康ハ、憚ル気色モナク、白昼ニ都ヲ立テ、三百余騎、ヒタスラ合戦ノ用意ニテ、美濃国ヘゾ下リケル。

諸大名が分国に下っていく場面に、師範は赤松定範の甥として登場する。これは『赤松系図』の記述と一致しており、『太平記』^⑤主要諸本を見渡しても、この箇所に特筆すべき異同は見当たらない。

続いて、巻三十二「神南合戦事」の例を示す。南朝方について山名が足利義詮の軍勢と対峙するこの場面で、赤松一族は足利方としてこの戦いに参加している。

一陣ノ西ノ尾崎ヲバ、赤松帥律師則祐・子息弥次郎師範・五郎

直頼・彦五郎範実・肥前権守朝範・佐々木佐渡判官入道ガ手者・黄旗一揆、彼此都合二千余騎ニテ固タリ。

則祐を筆頭に赤松一族の布陣が語られている。ここでは師範が赤松則祐の子息とされており、師範を資範の子とする『赤松系図』の記述とは異なっている。なお、『太平記』主要諸本の多くは右のような本文となっているものの、甲類本に属する内閣文庫本と乙類本に属する米沢本では、この箇所は「赤松弥次郎」とあるのみで、師範の名を明記していない。また、丁類武田本と現存最古の写本である永和本は、赤松則祐以外の赤松一族の名を挙げない。

さらにこの箇所で注意されるのは、「神南合戦事」直前の年次・日付が文和四年（一三五五）正月で、当該章段冒頭に「二月四日」とあることから、ここで描かれる神南合戦が文和四年の出来事と考えられる点である。前述のように、雪溪は延文二年（一三五七）以前に死去しており、それ以前には近江守となっていたと考えられる。しかし、『太平記』は文和四年時点においても師範を単に「弥次郎」としており、やや不審が残る。

最後に、巻三十六「山名豆州落美作城之事付筑紫合戦之事」^⑥、山名方が赤松則祐の守る城を攻撃する箇所を挙げる。

播磨ト美作トノ境ニハ、竹山・千草・吉野・石堂ガ峯、四箇所ノ城ヲ構テ、赤松律師則祐、百騎宛ノ勢ヲ籠タリケレバ、此勢ヲ拘ント、山名ガ執事小林民部丞、二千余騎ニテ、星祭ノ城ヘ打上リ、城ヲ目ノ下ニ見下テ、透間アラバ打テ懸ラント、馬ノ腹帯ヲ堅メテ扣タリ。赤松筑前守世貞・舍弟帥律師則祐・其弟彈正少弼氏範・同大夫判官光範・宮内少輔師範・掃部助直頼・筑前五郎顕範・佐用・上月・間嶋・柏原ノ一族、二千余騎、高

倉山ノ麓ニ陣ヲ取テ……

山名軍を迎え撃つ赤松の軍勢の中に師範の名も見えている。卷三十「怨霊驚人事」と同様、ここでも『太平記』主要諸本間で特に異同は見受けられない。

当該箇所で大きな問題となるのが、この戦いの起こった年次である。すなわち、卷三十六は最初の章段「仁木京兆宮方降参之事付大神宮御託宣之事」のはじめに「延文六年三月晦日ニ、康安元年ニゾ被レ改ケル」との改元記事を置く。その後も同年に起こった出来事を語った後、「山名豆州落美作城之事付筑紫合戦之事」は「此処ニ七月十二日」と語り始め、右に挙げた合戦記事へと続いている。ここから、師範の名が見える合戦記事は康安元年（一三六一）の戦いを描いたものと判断される。これは龍山示寂から三年後、雪溪の死去からは四年後に当たっている。

この矛盾をどのように理解すればよいのか。次の二つの可能性が考えられよう。すなわち、『太平記』で語られる合戦には師範が参戦していなかった可能性と、雪溪が師範ではない可能性である。残念ながら、信憑性の高い同時代史料に乏しいため、いずれとも判断しがたい。しかし、いずれにせよ、赤松氏が村上源氏の流れを汲んでいること、そして雪溪の仏事が行われた「大龍庵」が赤松円心によって建仁寺内に建立された塔頭であることを併せ考えると、雪溪が赤松氏の流れを汲む人物であった可能性は捨てがたい。

加えて、赤松則祐が建武年間に播磨に法雲寺を創建し、雪村友梅（一二九〇～一三四七）を迎えたことや、龍山から道号頒も授けられた雲溪支山（一三三〇～一三九一）が龍山没後の貞治二年（一三六三）に播磨へ下り、赤松氏の庇護を受けたことなど、赤松氏とこう

した禅僧との深い関わりも、間接的ながら龍山と赤松氏との関係を示唆するであろう。

このように、雪溪の人物比定については不明な点が残る。しかし、雪溪は左に示すように、『黄龍十世録』にその名が複数見え、龍山と親交のある人物であったことは確かなようである。まず、「偈頌」に収録された道号頒を挙げる。

雪江

形雲擁岸冷光浮、遠見砂城變玉樓^一。平復蔡州^二須李愬^一、猶如三祖^三遊誓^二中流^一。

雪溪

忽見同雲垂^二兩岸^一、玉蕤片片向風開。小舟撐出^二平沙外^一、疑是王郎訪戴來。

ここから雪溪という人物について得られる情報は決して多くないものの、この箇所は龍山の送った道号頒が並んでいる。雪溪は、少なくとも龍山から道号頒を授けられるような人物であったことが窺える。次に、「元朝偈頌」所収の次の作を挙げる。

錢江州太守雪溪源公

現宰官身^一現^二仏身^一、都来不^レ出^二箇心源^一。卹^レ民除^レ害有^二成命^一、応是児孫德茂存。

題からも分かるように、これは龍山が「江州太守」であった雪溪への餞として製作されたものと見られる。ここからは、雪溪が生前から龍山と親しい間柄であったことが知られよう。

以上よりすれば、帰国後の龍山の人的環境において、赤松氏ゆかりの人物であった可能性もある武士が重要な位置を占めていたと考えられるのである。

三 龍山と土岐氏・雲溪支山

続いて、「小仏事」⑩「土岐光祿女為慈母七週諱預請焼香」を取り上げる。全文は以下の通りである。

土岐光祿女為慈母七週諱預請焼香

此香、名_レ為無盡功德藏、含_二摂清淨法財_一。亦名_二無尽功德海_一、出_二三生如意宝王_一。亦名_二無尽功德地_一、長_二養一切善根_一。亦名_二無尽功德林_一、蔭_二覆熟惱衆生_一。種種名字不同、一一莊校殊勝。日本国京居奉_レ孝女源氏、偕_二諸家眷_一、延文三年 初二日、恭遇_二慈闈龍聖寺殿真慧大夫人七周之諱_一。預_二於今晨_一、敬就_二天龍資聖禪寺雲居庵_一、營_二弁香齋_一、供_二延聖賢_一。仍請_二本寺住持沙門某_一、爇_二此妙香_一。普熏_二天上人間它方異域_一。或聖或凡、一時同聞。六根清淨、増_二益福慧_一。即非_二仙陀婆無_レ能_レ勝_二波利悉多羅・白旃檀馥_一之可擬上。所_レ哀殊利、式資_二冥福_一。直得真慧夫人、心融_二三法界_一、念_二尽_二毗盧_一。遊_二戲宝明性海_一、超_二越菩提覺場_一。如_二摩耶夫人常為_二千仏之母_一、如_二娑羯龍女一生成仏_一。如_二三月上女証_レ入諸法無相_一、如_二瞿婆沙女觀_二察一切菩薩三昧_一。即想念而契_二真機_一、出_二塵勞_一而登_二淨界_一。処_二処運_二大神力_一、時時加_二護故家_一。門庭顯昌、子孫蕃盛。

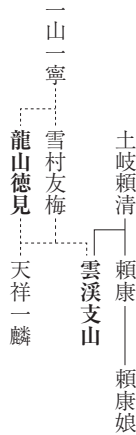
題に見える土岐光祿とは、当時の有力守護であつた土岐頼康のことである。ここからは、頼康の娘が母の七回忌仏事を営んだ際、焼香の役を龍山に依頼していたことが知られよう。さらに本文を見ていくと、この仏事は延文三年（一三五八）に天龍寺の雲居庵で営まれたことが分かる。前述のように、龍山は同年十一月に示寂しているので、これは龍山最晩年の事跡の一つに数えられよう。

では、龍山と頼康の娘との接点は、いったいどこに求められるのであろうか。有力な可能性として考えられるのが、禪を介した土岐氏と龍山との関わりである。そもそも土岐氏は、頼康をはじめとして禪に深く帰依していたことで知られている。その本拠地である美濃には禪院が多く建立され、一族からも禪僧が輩出した。^(注19) そのなかでも特に注目されるのが、土岐頼清の子雲溪支山である。後掲の關係図に示したように、頼清は頼康の父でもあるので、この仏事を主催した頼康の娘と雲溪とは叔父と姪の關係に当たる。そしてこの雲溪は、前述のように龍山から道号頌を授けられており、帰国後の龍山とも關係を築いていた。こうした龍山と土岐氏出身の禪僧とのつながりが、この龍山最晩年の仏事の背景にあつたことは想像に難くない。

加えて、雲溪の師である雪村友梅は、龍山と同時期に一山一寧に参じた後、若年にして元に渡り、長期にわたつて当地に滞在した。そのため雪村は「龍山徳見と酷似した経歴を持ち、相互に親密な交友關係があつた」という。^(注21) また、雲溪は後年、龍山の法嗣天祥一麟（一三二九―一四〇七）と親しく交わることもなる。^(注22)

このように、龍山と土岐氏とのつながりからは、雲溪の師である雪村友梅の存在や、龍山の法嗣と雲溪との親交といった、幾重もの關係性までも看取することができる。加えて、前章で述べたように、雲溪は赤松氏からの庇護も受けるようになる。帰国後の龍山と將軍家以外の武家との関わりにおいて、雲溪は重要な位置を占める存在であつたといえよう。

・龍山と土岐氏の関係図（実線は血縁関係、点線は嗣法などの関係を示す）



四 龍山周辺の禅僧と文芸生成の場

前章で検討した⑩「土岐光禄女為慈母七週諱預請焼香」からは、さらに龍山と密接な関わりを持つ禅僧と文芸生成の場とのつながりをもたざることができる。その端緒となるのが、母の七回忌仏事を執り行った「土岐光禄女」が二条良基の妻であり、良基最愛の子師嗣の母でもあったということである。師嗣は延文元年（一三五六）の生まれであるから、この仏事が行われた延文三年の時点で、彼女は既に良基との間に子をもうけていたことになる。

周知のように、良基は後光厳流の北朝において重きをなし、足利義満とともに朝政を主導した。准勅撰の連歌集『菟玖波集』の編纂など、その文学的な事績も周知の事柄に属していよう。良基を中心とする和漢聯句の会には、禅僧はもとより様々な人々が参集した。その中には、龍山と密接な関連を持つ人物も含まれている。

まずは、義堂周信の日記『空華日用工夫略集』永徳元年（一三八一）十一月十九日条を挙げる。

十九日 与二大清（筆者注、太清宗渭）一同赴二条殿二而聯句。々

殿下発題、同会者、万里小路父子（筆者注、仲房・嗣房）・侍従中納言（筆者注、三条西公時）、房城父子（筆者注、東坊城秀長・長遠）、僧伴相山・雲溪（筆者注、相山良永・雲溪支山）。或告、天境和尚昨夕示寂。

記主の義堂は、太清宗渭（一三二一～一三九二）と同道して二条殿に赴き聯句を行った。この太清は早歌の作者としても知られる小串範秀の子で、雪村友梅の法を嗣いでおり、雲溪にとっては兄弟弟子にあたる。この聯句会から五年後の至徳三年（一三八六）に張行された「良基・絶海・義満等一座」和漢聯句」にも、太清は作者の一人として名を連ねている。

右に挙げた永徳元年の聯句には、義堂と太清以外にも、万里小路仲房・嗣房父子といった公家や、相山良永（？～一三八六）が参加しており、注目すべきことに、雲溪もここに同席していたことが知られるのである。

さらに、この記事から二年後の永徳三年（一三八三）七月四日条には、次のような興味深い記事が見られる。

七月四日 赴二大龍庵和漢会一。府君（筆者注、足利義満）密告レ余曰、「昨日当寺長老古剣（筆者注、古剣妙快）入府、見レ賀二准后官号一。時値二沐髮二不レ出レ迎。恐二他作レ怪也。幸希之知」。

義堂が大龍庵の「和漢会」に赴いたところ、義満から密かに声をかけられたことが記されている。ここで「和漢会」が行われた大龍庵は、前述した通り赤松円心ゆかりの建仁寺塔頭であり、この時は雲溪が塔主を務めていた。小川剛生氏が既に指摘しているように、この時の「和漢会」には、二条良基も参加していたと見られる。さらに、

龍山の法嗣である天祥に「謹奉同二条関白殿下韻、呈大龍雲石禪師」と題する詩があり、天祥もまたこの「和漢会」に同座していたと考えられるのである。

右に挙げた記事は、龍山示寂から二十年以上も後の事例であり、龍山との直接の関わりが窺えるわけではない。しかし、龍山の法嗣に加え、龍山・赤松氏・土岐氏いづれとも密接な関係にあった雲溪までが公武・僧俗の垣根を越えた文芸生成の場に姿を見せていたことは、龍山の文学的影響について考える上で注目されよう。

五 龍山とその法嗣の詩句利用の可能性

前章までの考察からは、龍山と武家との関わりや、良基を中心とする文芸生成の場と龍山ゆかりの僧とのつながりを指摘することができた。残念ながら、前章で取り上げた和漢聯句の場における雲溪や天祥らの実作は残されていない。したがって、それらが龍山の詩や偈頌類から具体的にどのような影響を受けていたのかも不明である。

しかし、帰国後の龍山およびその周辺と文学作品との関わりをわずかながら窺い得る例として、最後に『太平記』巻四十「光厳院禪定法皇御斗敷之事付同崩御之事」（以下、「光厳法皇行脚記事」と呼ぶ）の事例を取り上げることしたい。

「光厳法皇行脚記事」は、文字通り光厳法皇の行脚と崩御、三回忌法要までを語る。『太平記』諸注釈も指摘するように、当該章段にはいくつもの典拠未詳の漢詩句がちりばめられている。その一つに、光厳が道中で眼前の夕景に接して想起する「望無窮水接天色」看不尽山映二夕暉」という対句がある。筆者は以前、これが龍山の詩

の一部であることを明らかにした。^(注32) この対句は、龍山の詩の同時代における受容例の一つに数えることができる。

さらにこのことと関連して、当該章段には注目すべき典拠未詳の表現が見られる。光厳が諸国行脚を終えて、丹波国山国での生活を送る箇所である。

山果庭二落テ朝三ノ食秋風ニ飽キ、柴火爐ニ宿シテ夜薄衣ノ寒氣ヲ防グ。吟肩骨瘦テ泉ヲ擔ニ懶キ時ハ、石鼎ニ雪ヲ湘テ三椀ノ茶ニ清風ヲ飲シ、仄歩山嶮シテ蕨ヲ折ニ倦キ時ハ、巖窓ニ梅ヲ嚼デ一聯ノ句ニ閑味ヲ甘ジ給フ。

対句表現を多用して光厳の閑寂な生活を描くこの場面では、全体的に典拠未詳の表現が用いられている。傍線部は「吟肩」すなわち詩人の肩が痩せ細っていて、泉の水を汲むことにも耐えがたいということが述べられており、これも何らかの漢詩句に拠るとみられる。とはいえ、その直接の典拠までは明らかにし得ない。

この中で「吟肩」という表現自体は、禪関係の文献を中心にくつもの用例を拾うことができる。^(注33) しかし、「吟肩骨瘦」となると、『五山文学全集』や『五山文学新集』、『四庫全書』にも用例を見出しがたい。「光厳法皇行脚記事」の当該典拠未詳句は、微細な箇所ながら、稀な表現が用いられている例と考えられる。

こうした用例分布の状況にあつて、「吟肩骨瘦」という表現が、龍山の法嗣である天祥の詩に見出されることは注目される。『天祥和尚録』坤に収録されている「和常」^(常光院) 在龍湫和尚句」を次に挙げる。

和常 ^(常光院) 在龍湫和尚句

異域移不_レ倦_レ看、吟肩骨瘦聳_二秋山_一。胡為_二諾詎大尊者_一、冥坐飛流岩窟間。

次龍湫和尚仏成道句

咄哉甘蔗氏余芽、棄^レ却金輪^二不^レ繼^レ家。今日下山无^二折合^一、
袈裟撩乱歩爬沙。

〔和常^(常光院)在龍湫和尚句〕とは、文字通り常在光院の龍湫周沢（一二〇八～一三八八）に和したもので、その二句目に「吟肩骨瘦」との表現が見えるのである。龍湫が常在光院にいたのは永和元年（一二三五）から翌二年にかけてのことであり、この作が詠まれたのもその頃であろう。

光嚴法皇行脚記事の成立上限は応安三年（一二七〇）と考えられている。^(注5)一方、成立下限についてはなお定見を見ない。兵藤裕己氏は、この章段が南北朝合一後の時代背景を踏まえているとして、明德三年（一二九二）以降に成立した可能性を指摘している。^(注6)とはいえ、長坂成行氏が指摘するように、兵藤氏の注目した箇所が単に南北朝勢の時世を表すものに過ぎないと考えれば、南北朝合一以前の成立と見ることも可能である。

このように、光嚴法皇行脚記事の明確な成立下限は明らかでないものの、長坂氏による宝徳本文の復元からは、宝徳年間にはこの章段を大尾とする『太平記』写本が存在していたことが知られる。^(注8)したがって、当該章段は、遅くとも宝徳年間以前には成立していたと見られる。とすれば、「光嚴法皇行脚記事」が天祥の詩を取り込んだ可能性を全く排除することはできない。

もともと、本稿で指摘し得たのはごく微細な表現の一致に過ぎず、このことを以て、ただちに天祥の詩が「光嚴法皇行脚記事」当該箇所^(注9)の典拠の一つであると即断することはできない。「吟肩骨瘦テ」に続く「泉ヲ擔ニ懶キ時ハ」以下の表現の源泉は依然として不明であ

り、「吟肩骨瘦テ」という表現だけから当該章段の成立時期を特定することにも、なお慎重であるべきであろう。しかし、龍山の詩を引用する「光嚴法皇行脚記事」において、他に用例を見出しがたい典拠未詳の表現が、龍山の法嗣の詩に用いられている表現に一致するという事実は、きわめて示唆的である。

おわりに

ここまで本稿では、『黃龍十世録』『小仏事』を中心とした分析から、およそ以下の点を指摘してきた。

- ① 帰国後の龍山と、將軍兄弟以外の武家との関わり。
- ② 龍山・土岐氏・赤松氏いずれとも密接な関わりを持った雲溪の存在の重要性。
- ③ 二条良基を中心とする文芸の場と、雲溪や龍山の法嗣天祥との関わり。

- ④ 『太平記』光嚴法皇行脚記事において、天祥と龍山の詩が利用されている可能性。

いずれも、新資料を掘り起こした成果というわけではなく、よく知られた資料を従来とはやや異なった角度から捉え直してみたというに過ぎない。また、本稿のはじめにも述べたように、龍山のもとには義堂周信や絶海中津といった、後の五山文学を牽引する禪僧たちも参じている。そのため、龍山から影響を受けた僧たちが当時の文芸生成の場に身を置いていたことは、自明のことといえるかもしれない。

しかしながら、帰国後の龍山の事跡に着眼した研究自体が手薄であり、さらに龍山と赤松氏や土岐氏といった武家との関わりは従来

注目されることがなかった。こうした武家との関わりから和漢聯句のような文芸生成の場との関連まで窺い得ることは、帰国後の龍山およびその周辺の文学的な環境や、龍山の文学的な影響力を探っていく上で一つの手がかりとはなり得よう。

加えて、現時点ではあくまで可能性の指摘にとどまるものの、もし『太平記』の「光厳法皇行脚記事」が、龍山だけでなく天祥の詩も利用していたとすれば、当該章段における典拠未詳句のうち、二つは龍山とその法嗣の詩が典拠であったことになる。筆者は前稿において、この詩と取り合わせられている和歌が、『歌枕名寄』のような名所和歌の類に依拠して作られた可能性が高いことを指摘した。^(注30) 前稿で示したように、今後は、そうした和歌と龍山の詩を取り合わせることでできた場を明らかにしていく作業が必要となってくる。本稿の指摘は、そうした場を限定していく上で、一つの糸口になり得るものといえる。

このように、龍山の帰国後の人的環境を復元していくことは、禅僧や武士たちと龍山との関係性を明らかにするだけでなく、五山文学以外の文学作品の成立基盤を解明することにも資することが期待される。本稿では『黄龍十世録』の一部を対象とした雑駁な報告にとどまったものの、かかる観点からの考察は引き続き行われていくべきであろう。

〈注〉

- (1) 近年の主要な研究としては、榎本渉『僧侶と海商たちの東シナ海』(講談社学術文庫二〇二〇年〈初版は二〇一〇年〉)が挙げられる。

- (2) 玉村竹二氏は、龍山が在元時に古林清茂に師事したことなどを挙げた上で、龍山の文学上の影響についてこう論じている(『五山禅僧伝記集成』思文閣出版、二〇〇三年〈初版は一九八三年〉「龍山徳見」の項)。

龍山が古林清茂に就いて偈頌を学んだ事は、日本の禅林文学の一方の旗頭たるに十分で、果してその門主には、義堂周信・絶海中津・先覺周帖・天祥一麟等を出し、五山文学の興隆の端緒を作った人として、極めて注目すべきである。

このように、龍山が後の五山文学興隆のきっかけとなった点が高く評価されている。

- (3) 拙稿『太平記』光厳法皇行脚記事における詩句利用——典拠未詳対句を中心に——(関西軍記物語研究会編『軍記物語の窓』第六集、和泉書院、二〇二二年)。

- (4) 引用は、『五山文学新集』に拠る。文献の引用に際しては、句読点等を補うなど、私に表記を改めた点がある。

- (5) 絶海中津の伝記『翊聖国師年譜』文和二年(一三五五)条に、次のような記事が見える(引用は、『続群書類従』に拠る)。

文和二年癸巳。師(筆者注、絶海中津)年十八、掛二錫於東山建仁。与二信義堂(筆者注、義堂周信)・帖先覺(筆者注、先覺周帖)・勲月舟(筆者注、月舟周勲)・寿天錫(筆者注、天錫周寿)等一、同レ時慕二龍山和尚之高風一。

ここからは、若き日の絶海中津が、義堂周信たちと「龍山和尚之高風」を慕い、建仁寺に掛錫したことが知られる。

- (6) 引用は、『五山文学新集』に拠る。
- (7) 引用は、『続群書類従』に拠る。高坂好氏はこの『赤松系図』その三

について、「範資に対する所領安堵下文にみえる赤松惣領の所職の白旗・春日両社神主職のことなども記している（これを記した系図は他に一つも見当たらない）更に信頼度が増すものと考えている」とする（人物叢書『赤松円心・満祐』吉川弘文館、二〇一三年（初版は一九七〇年））。

(8)

『大阪府史』第三卷中世編一（大阪府史編集専門委員会編、一九七九年）は、『東寺執行日記』貞治二年（一一六三）八月の記事に見える「赤松彦五郎」を師範に比定している。これが事実とすれば、師範の活動を記す貴重な史料といえる。しかし、『太平記』その他では、赤松彦五郎は範実のことを指しており、小川剛生氏も赤松彦五郎を範実とする（『中世和歌史の研究——撰歌と歌人社会——』塙書房、二〇一七年）。小川氏の見解に従うべきであろう。

(9)

引用は、前田育徳会尊経閣文庫編『玄玖本太平記』（勉誠社、一九七三（七五））に拠る。

(10)

本稿で参照した『太平記』諸本は以下の通り。

神田本（『神田本太平記』汲古書院、一九七二年）

※巻三十を欠く

西源院本（『西源院本太平記』クレス出版、二〇〇五年）

神宮徴古館本（『神宮徴古館本太平記』和泉書院、一九九四年）

玄玖本（前掲『玄玖本太平記』）

甲類

南都本（『国文学研究資料館蔵紙焼写真』）

内閣文庫本（『国立公文書館デジタルアーカイブ』）

築田本（『国立国会図書館デジタルコレクション』）

筑波大学本（『国書データベース』）

永和本（『国書データベース』）

※巻三十二のみの零本

陽明文庫本（今川家本）（『国文学研究資料館蔵紙焼写真』）

米沢本（市立米沢図書館デジタルライブラリー）

毛利家本（『国文学研究資料館蔵紙焼写真』）

梵舜本（『古典文庫』）

乙類

丙類

天正本（『国文学研究資料館蔵紙焼写真』）

教運本（『国立国会図書館デジタルコレクション』）

丁類

京大本（『校訂京大本太平記』勉誠出版、二〇一一年）

武田本（『國學院大學図書館デジタルライブラリー』）

※巻三十二・三十六を欠く

なお、『太平記』における赤松氏の形象については、瀬戸祐規『『太平記』における赤松氏——赤松円心・則祐を中心に——』（前掲『軍記物語の窓』第六集）に詳しい。それによれば、『太平記』において、「円心と対照的な関係にあった則祐は、さらに範資と対比されることで、事態を切り開き好機をもたす者として、その存在がより明確にされている」という。こうした傾向は、『太平記』において範資の子である師範が詳述されないことも連動しているようか。

(11)

片岡秀樹『『投贈和答等諸詩小序』にみる播磨の雲溪支山について』（『歴史と神戸 神戸を中心とした兵庫県郷土研究誌』第五十一巻第四号、二〇一二年八月）も、この偶から師範の死去が「龍山遷化の延文三年（一一五八）以前であったことになり」としている。

(12)

前掲『赤松系図』には、「村上源氏」とある。

(13)

雪村友梅の法孫大有有諸による伝記『雪村大和尚行道記』には、大龍庵建立について、次のように記されている（引用は、『続群書類従』に拠る）。

明年（筆者注、貞和四年（一一三八））丁亥。円心特創「塔院於

維之東山建仁」。以下「其地」。又明年春蒙「綸命并鈞旨」。廼取「生祠」。扁曰「大竜」。

このように、貞和四年に円心が建仁寺に寺院を建立し、扁額を「大竜」といったという。

(14) 注(7) 高坂氏著書参照。

(15) 『黄龍十世録』「偈頌」に、

雲石

起レ從二膚寸一遂為レ霖、普潤二蒼生一功益深。懸不レ着兮驅不レ動、有言元自出二無心一。

とある。雲石とは雲溪の道号のことである(玉村竹二『五山禪僧伝記集成』思文閣出版、二〇〇三年〈初版は一九八三年〉「雲溪支山」の項参照)。

(16) 注(11) 片岡氏論文参照。

(17) 玉村竹二氏は、春屋妙葩『智覚普明国師語録』中の「土岐智山性慧禅尼」五七日忌の陞座法語に「濃州太守前光祿大夫某」と「令弟子州太守」の名が見える点から、「土岐氏のうちで兄が美濃守護で大膳大夫、弟が伊予守である兄弟を求めると、頼康と直氏とな」ると指摘している(「中世前期の美濃に於ける禅宗の発展」『日本禅宗史論集 下之二』思文閣出版、一九八一年〈初出は一九七五年〉)。

(18) 注(17) 玉村氏論文参照。

(19) 前掲『五山禪僧伝記集成』「雲溪支山」の項参照。

(20) 前掲『雪村大和尚行道記』には、次のようにある。

師(筆者注、雪村)成宗大徳十一年入唐。文宗天暦二年帰朝。日本元徳元年己巳也。甫二十八歳一至三十一、在唐廿三年。貞和二年丙戌入滅。

これによれば、雪村は十八歳から四十歳まで、二十三年にもわたって在元していたことが知られる。

(21) 前掲『五山禪僧伝記集成』「雪村友梅」の項参照。

(22) 正宗龍統(一四二八―一四九八)による天祥の行状「一庵大禪師行状」には、次のようにある(引用は、『続群書類従』に拠る)。

一時名宿義堂(筆者注、義堂周信・龍湫(筆者注、龍湫周沢)・大清(筆者注、太清宗渭)・黙庵(筆者注、黙庵周論・絶海(筆者注、絶海中津)・空谷(筆者注、空谷明応)・靈岳・雲溪、皆莫逆也。互有二唱和一。

これによれば、義堂周信や太清宗渭らとともに、雲溪も天祥の「莫逆」すなわち親友であったという。

(23) 小川剛生『二条良基研究』(笠間書院、二〇〇五年)。

(24) 『公卿補任』応安元年(一二六八)の条にはこう記されている(引用は、『新訂増補国史大系』に拠る)。

從三位 二条 藤師嗣(十三)二月廿一日叙。同日右近權中将ノ如シ元。四月十九日任二權中納言一。

前関白藤原良基公二男。母土岐春日入道善忠(筆者注、頼康女)。

応安元年に十三歳であったことから、師嗣の生年は延文元年(一二三五六)であったことが知られる。

(25) 引用は、国立公文書館デジタルアーカイブの室町末期写本に拠る。

(26) 前掲『五山禪僧伝記集成』「太清宗渭」の項参照。

(27) 京都大学国文学研究室中国文学研究室編『良基・絶海・義満等一座和漢聯句譯注』(臨川書店、二〇〇九年)。

(28) この時の古劍妙快の作の題「次韻二条拱政大相公訪雲石於東山大龍

庵」や、天祥の作の題「謹奉同二条関白殿下額、呈大龍雲石禪師」に見える雲石とは、前掲注(17)にもあるように、雲溪の道号である。

(29) 注(23)に同じ。

(30) 『天祥和尚録』坤に、この時の作として次の詩が収録されている(引用は、『五山文学新集』に拠る)。

偶出二九重一黄閣深、来分二禪榻一共咸吟。名緇賢相一眈会、異日山中応記レ今。

(31) 具体的には、以下の表現が挙げられる。

①来ルニ無レ所レ至、去ニ無レ所レ從スル。拄杖頭辺ニ活路通。

②焼痕廻レ緑テ春容早ク、松影ノ穿レ紅日脚西ナリ。

③花落テ為レ雪ドモ笠ハ重コト無ク、深樹謬レ昏ドモ、日未傾カズ。

④嶺松含レ風テ瑜伽上乘ノ理ヲ顯シ、山花掩レ雲ヲ赤肉中台ノ相ヲ秘ス。

⑤山果庭ニ落テ朝三ノ食秋風ニ飽キ、柴火爐ニ宿シテ夜薄衣ノ寒氣ヲ防ケ。

⑥吟肩骨瘦テ泉ヲ擔ニ懶キ時ハ、石鼎ニ雪ヲ湘テ三椀ノ茶ニ清風ヲ飲シ、仄歩山嶮シテ蕨ヲ折ニ倦キ時ハ、巖窓ニ梅ヲ嚼デ一聯ノ句ニ閑味ヲ甘ジ給フ。

このうち②の傍線部については、元の詩人貢子之の詩との類似が指摘されている(森田貴之「『太平記』と元詩——成立環境の一隅——」『国語国文』第七十六卷第二号、二〇〇七年二月)。

また、新編日本古典文学全集頭注は④について、「山果経テ霜ヲ多ク自ラ落テ」という『三体詩』卷二項斯「宿二山寺一」の表現を参考として挙げ、さらに⑤の「石鼎ニ雪ヲ湘テ三椀ノ茶ニ清風ヲ飲シ」については、以下を参考として挙げている。

・「石鼎ノ茶烹ニ雪乳ノ香キヤ」(貞和類聚祖苑聯芳集・卷十、中峰「煎

茶)

(32) 「三碗ニシテ搜ニルニ枯腸ヲ一、惟有「ルノミ文字五千卷」、……七碗ニシテ喫スルヲ不レ得也、只覺ユ両腋習習トシテ清風生ズルヲ」(廬全「茶歌」注(3)に同じ)。

(33) 例えば、義堂周信『空華集』の「題扇面」四十二首のうちの一首に、次のような例が見える(引用は、『五山文学全集』に拠る)。

占ニ断西湖雪後天一、黄昏月下聳ニ吟肩一。不レ知疎影暗香外、添ニ得梅花詩幾聯一。

ここでは、月下に詩人が肩をそびやかす様が「聳ニ吟肩一」と表現されている。

(34) 前掲『五山禅僧伝記集成』「龍湫周沢」の項参照。

(35) 『太平記』諸注釈も既に指摘するように、章段中で語られる光厳三回忌の様子が、実際には光厳七回忌の仏事を下敷きにしており、そこから光厳七回忌に当たる応安三年(一二七〇)が当該章段成立の上限と考えられている。

(36) 兵藤裕己『太平記』——情況と言葉——(『日本文学講座4 物語・小説』大修館書店、一九八七年)。

(37) 長坂成行「『太平記』終結部の諸相——光厳院行脚の事——をめぐって——」(『日本文学』第四十巻第六号、一九九一年六月)。

(38) 長坂成行「宝徳本『太平記』復元考——河村秀頼校合本による——」(『奈良大学紀要』第十四号、一九八五年十二月)。

(39) 拙稿『太平記』光厳法皇行脚記事における和歌利用——御津の浜での光厳詠を中心に——(『福岡大学日本語日本文学』第三十二号、二〇二三年一月)。

※本稿は、JSPS科研費（基盤研究（C）課題番号22K00332）による研究成果の一部である。